

和田実の「幼児教育論」について

辛 椿仙

まず、『幼児の教育』誌が一〇〇巻を迎えたことにお祝い申し上げる。

創立一〇〇周年という記念すべき年に『幼児の教育』の誌上に和田実（一八七六—一九五四）を紹介する文を載せることができ、私にとつてはこの上ない光栄である。一〇〇年前、『婦人と子ども』という幼児教育専門誌として出発し、戦争中

は休刊を余儀なくされる苦難もあつたが、今日に至るまで日本の幼児教育を見守りながら地道に歩んできた歴史ある『幼児の教育』誌には、心より敬意を払いたいと思う。これからも『幼児の教育』誌のますますのご発展を祈念する次第である。

私は今、韓国でこの文を書いている。韓国でこ

のように『幼児の教育』に文を送ることができ
るのは、日本で出版された『和田実における「幼児
教育論」―その成立と展開に関する研究―』とい
う私の著書がきっかけである。この著書は、京都
大学の博士論文に少しの修正を加え、本として出
版したものである。この本を世に出すきっかけを
与えてくださったのは、和田実学園長の和田淑先
生である。

『幼児の教育』の編集部の方がこの本で私を知
り、韓国までわざわざ連絡をとってくださった。

『幼児の教育』発刊一〇〇周年記念として、日本
の幼児教育界の先駆者である和田実について執筆
をしてくれないかという連絡であった。私はそれ
は大いに意義のあることと思ひ、執筆を快く引き
受けることになった。この場を借りて、和田を振
り返ってみる機会を与えてくださった『幼児の教
育』の関係者の方々にお礼申し上げたいと思う。

本題に入る前に、まず私が和田を研究するよう
になったきっかけについて述べることにしよう。

私は韓国の梨花女子大学の教育学科で幼児教
育を専攻し、卒業とともに幼稚園の教諭になっ
た。当時、一九八〇年代に韓国の幼児教育は、国
の積極的な奨励によって飛躍的な発展を遂げた。

この時期になってようやく幼児教育の必要性や重
要性が叫ばれるようになり、量的な面でも質的な
面でも著しい発展を遂げたのである。しかし、一
九八〇年代以降の幼児教育の急速な発展はさまざ
まな問題も抱えていた。

韓国の幼児教育が社会の高学歴志向や知識万能
主義の風潮のもと、知識中心の早期教育論に偏っ
ていて、身体の健康、

情緒の安定、知的発達
という三者のバランス
のとれた幼児教育はほ



ほとんど考慮されず、親たちは幼児教育機関に学校教育で求められている読み、書き、算数などの知識中心の教育を要求することが多かった。それゆえ、大部分の幼児教育機関は園児の確保のため、こうした社会の教育風潮や親の要求に応える知識の詰め込み教育を行っていた。このような問題を幼児教育界では認識しつつも、その対策は十分になされていなかったのである。私は、韓国には幼児教育の考え方を根本的に変えるような刺激が必要であると思っていた。

このように考えていた私は、かねてより関心があった日本の幼児教育を本格的に勉強したいと思ひ、京都大学へ留学し日本の幼児教育について研究を始めた。日本の幼児教育を知るためには、まず、その歴史を探ることが必要であると思つた。日本の幼児教育の歴史を調べてみたのはそのためである。そして、明治時代に欧米の幼児教育の思

想や実践が伝えられて以降、現在の幼児教育が成り立つまでには先駆者たちの多大な努力が積み重ねられていくことが分かった。

日本の幼児教育が安定した発展を遂げてきた背景には、幼児のためになる幼児教育を作り出すと努力した先駆者があり、彼らによって、日本独自の幼児教育を構築する努力が絶えず続けられてきたことがあった。この点を考えてみると、今日の日本の幼児教育の基礎をつくりあげた先駆者の考え方や実践の展開に関する研究は日本がどのようにして幼児教育を自国のものとして定着させてきたかということ明らかにすることにもなると思つた。

このような視点から私は、日本の幼児教育における先駆者に関して研究してみたいと思うようになった。そのような先駆者のなかでもとくに、和田という人物に注目するようになった。私が日本

の幼児教育における先駆者のなかでも和田を選んだのは次のような理由があった。

それはまず、第一に、和田の幼児教育一筋の生涯や独創的な教育思想に惹かれたからである。第二に、私は和田が欧米近代の幼児教育論を踏まえながら、それを日本の社会の状況に合う幼児教育論として組み直し展開していった点に着目し、その展開の過程を探ってみれば、まだ自国のものとして定着できず揺れ動いている韓国の幼児教育の現状にとって、意義のあることであると思われるからである。第三に、和田が当時のフレーベル遊具（恩物）の取り扱ただけにこだわる幼児教育に鋭い批判を加え、遊び中心の画期的な幼児教育論をつくりあげた改革精神に魅力を感じたからである。

フレーベルの教育思想は忘却され、技術的な方法の伝授だけにこだわっていた日本の明治初期の

恩物中心の幼児教育のあり方は、時代ははるかに違っても現在、韓国の知識中心の幼児教育のあり方と共通点をもっているように思われた。和田の幼児教育の現実への批判の目や単なる批判にとどまらず、積極的に改善しようとした彼の改革者的精神は、韓国の幼児教育界にとって刺激になってくれるものであると思った。

このような経緯で私は和田の幼児教育論をテーマにして研究に取り組むようになった。

以下では、和田の幼児教育論の前提解として、和田の生涯および彼の幼児教育論の全体像とその歴史的意義についてまとめてみることにしよう。

和田は一八七六年、東京に生まれ、一八九七年に神奈川県尋常師範学校を卒業し、神奈川県下の小学校教員を経て、一九〇五年、東京



女子高等師範学校嘱託となり、一九〇七年に同校

助教授に昇進した。そこで彼は同校付設の保育実習科で教えることになり、彼の保育思想をまとめ、一九〇八年、中村五六（一八六一—没年不詳）幼稚園主事との共著という形で『幼児教育法』を出版した。同時に東基吉（一八七二—一九五八）の後をついで『婦人と子ども』誌の編集に当たり、活発な啓蒙的文筆活動を行った。

しかし、一九一二年、彼は同校附属小学校の専任にまわされ、幼稚園と関係をつつことになった。一九一五年和田は、同校を退職することを決意し、自力で私立「目白幼稚園」を開設した。さらに一九三〇年には「目白幼稚園保母養成所」を創設し、新時代に生きる保育者の養成に尽力するかたわら、幼児教育学の体系化に努力した。このように和田は一生を幼児教育に捧げて生きた人物であり、幼児教育の理論と実践の両方で活躍した

人物であった。

近代日本の幼児教育は、欧米文化の幼児教育を積極的に受容して成立した。草創期の幼稚園では、遊戯が学校の教科のように時間割りで定められ、フレイベル遊具（恩物）の取り扱いなどが教えられた。こうした時代背景の下で和田は、幼児の自由な自己活動の発揮を強調する革新的な著書『幼児教育法』を著した。

この著作は、幼児の生活の大半を占める「遊戯」に注目し、それを日本の実情に合う幼児教育として組み直したものである。ここでは、当時保育項目の一つに過ぎなかった「遊戯」が幼児教育の中心的内容として論じられている。「遊戯」こそ、幼児の発達を促し、人間形成を図る萌芽と見なされた。

『幼児教育法』出版以前の幼児教育関係文献では、フレイベル遊具（恩物）が絶対的位置を占

め、「幼稚園保育及設備規定」で定められていた「遊嬉、唱歌、談話、手技」の保育四項目をもつて幼児教育が論じられていた。

こうした当時の幼児教育界や幼稚園教育のあり方からみると、和田の「遊戯」に関する考え方は、幼児教育の根本を揺るがす画期的なものであった。こうした歴史的事実から和田を遊戯中心の幼児教育への道を開いた近代日本の幼児教育の先駆者として位置づけることができたのである。

しかし、和田の名は、日本近代幼児教育史における役割の大きさに比して必ずしも著名とは言いがたい。和田はなぜ、忘れられたのであろうか。それは倉橋惣三（一八八二—一九五五）との関係を通して説明することができる。倉橋は、遊戯中心の幼児教育を提唱した近代日本の幼児教育界の代表的指導者であり、彼の体系的幼児教育論は、現在の日本の幼児教育の基礎をなしたものと評価さ

れている。彼の幼児教育論は、膨大な研究成果によって、現在の幼児教育の中に生き続けている。

しかし、倉橋が何の影響も受けずに、そのような体系的幼児教育論を構築したとは言い難い。倉橋の幼児教育論の前提には和田という存在があったことが見落とされてはならない。和田によって初めて打ち出された革新的な遊戯中心の幼児教育の考え方が、倉橋によって受け継がれ、一般に広まったものと考えられる。

和田の幼児教育論は、倉橋によって吸収され体系的に完成された。和田を抜きにして、倉橋の幼児教育論は成り立たないとさえ言えよう。改めて倉橋を理解するためにも、その前提としての和田の幼児教育論の研究は欠かすことのできない作業である。日本の幼児教育の主流として、



リーダーの役割を果たしてきた倉橋の幼児教育論のうしろに、和田の幼児教育論がひっそり立っている。和田の幼児教育論が倉橋の幼児教育論として脚光を浴び、その姿が見えなくなったのである。

児童中心主義を批判した城戸幡太郎（一八九三—一九八五）の幼児教育論が、倉橋の幼児教育論とは異なる立場の論として対比して論じられることがある。しかし、和田の幼児教育論は、倉橋の幼児教育論と対比される立場でなく、倉橋と立場を共有していたので、改めて言及されることなく、自然に日本の幼児教育界から和田の名が忘れられていったのである。

私は、和田が近代日本の幼児教育の考え方を根本的に変える革新的な「遊戯的教育」を打ち出した先駆者であり、さらに、その遊戯中心の幼児教育が倉橋に受け継がれ、現代日本の幼児教育の基

礎を築いたという点で、和田を評価する。現代日本の幼児教育を考える際にも、和田の幼児教育論は大きな意味をもつと私は考える。

しかし、これまで和田の著作や雑誌論文を詳細に把握し、近代日本の幼児教育史における和田の位置づけを試みた研究は皆無と言って過言ではない。こうした和田に関する研究状況を鑑み、私は和田の著作と雑誌論文の精密な分析を通して、当時の幼児教育界に果たした彼の先駆的役割を明らかにし、和田を日本の幼児教育史上に位置づけたと思った。これは、和田研究において初めての試みとなる。このように和田の幼児教育論に注目し、その再評価を試みるところに私は和田研究の意義を見い出すことができた。

前述のように私の和田研究は、和田の「遊戯的教育論」が近代日本の幼児教育に果たした革新的役割の位置づけを試みる立場をとるが、和田の幼

児教育論は、「遊戯的教育論」だけで成り立つものではない。和田は幼児の生活を把握し、幼児教育は「遊戯」と「習慣」行動の二つの側面で行われるべきものと考え、それを発展させ、「遊戯的教育論」と「訓育的誘導論」という幼児教育理論を構築した。幼児の生活全体を考える際、能動的自己活動としての遊戯とともに、受動的ではあるが、しつけによる訓育も欠かすことのできない側面であると考えたのである。

和田はさらに、自ら幼稚園の実践家であったがゆえに、幼児教育理論だけにとどまらず、彼の幼稚園の実践に基づいて「幼稚園論」を作り上げた。前者の二つの幼児教育理論に実践論が加わることで、和田の幼児教育論は完結する。

以上、和田の生涯と彼の幼児教育論の全体像、その意義についてまとめて見た。和田の幼児教育論は彼の著作だけでなく『幼児の教育』に載せた

雑誌論文に彼の真髓がよく現れている。

次回には、和田が『幼児の教育』に投稿した雑誌論文を中心に彼の幼児教育論について紹介したいと思う。

(梨花女子大学校)

